

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その13 蚕と絹）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

蚕糸業・絹織物業はかつて日本の一大産業であった。「蚕糸業要覧」によると明治時代から昭和の初期ころまで日本の総輸出額のうち生糸類は30～40%を占め、明治元年にはなんと67%が生糸、大正元年には31%が生糸、6%が絹織物、昭和元年には37%が生糸、7%が絹織物だった。養蚕は全県で行われ、この項目での統計が最も古い大正4年には農家554万戸の3割にあたる167万戸が、昭和の初めには4割の農家が養蚕を営んでいた。生糸類の輸出により獲得した外貨で機械設備や原料が輸入され、日本の近代化を大きく支えたのである。

蚕や絹は音楽の中にも姿を残す。長野県歌〈信濃の国〉（作詞：浅井冽，作曲：北村季晴，明治33年に発表 昭和43年県歌に制定）の3番は絹糸が国の経済を支えたことを歌っている。

へ木曾の谷には真木茂り 諏訪の湖には魚多し
民のかせぎも豊かにて 五穀の実らぬ里やある
しかのみならず桑とりて 蚕飼いの業の打ちひらけ
細きよすがも軽からぬ 国の命を繋ぐなり

長野県庁前には〈信濃の国〉の堂々たる歌碑が建つ。「建立のことは」には昭和51年に長野県が100周年を迎えるにあたり親しみの念を新たにするとともに長く後世に伝えるため県の毎戸10円、小中高校生1円ずつの募金により県民皆で建てたとの趣旨が彫られている。県民がこの歌を誇りに思うわけである。



「信濃の国」の歌碑（長野県庁前）

〈信濃の国〉のほかに地方自治体の歌では栃木県小山市の市歌〈小山わがまち〉、長野県岡谷市の〈岡谷市歌〉にも養蚕に関係したフレーズがある。民謡〈伊那節〉の蚕や繭はそれが人々の生活と深くかかわっていたことを思わせる。

「おわら風の盆」で有名な富山県の八尾町も養蚕が盛んだったところで、〈越中おわら〉は桑摘みや糸繰り等のときに乙女たちが口ずさんだ作業歌の側面を持ち、〈正調越中おわら〉には養蚕作業の一節が歌われている。

〈鉄道唱歌〉第三集（作詞：大和田建樹 作曲：多梅稚・田村虎蔵）は有名な〈鉄道唱歌〉の奥州・磐城篇で、9番では「足利桐生伊勢崎は音に聞こえし養蚕地」とある。

文部省唱歌〈田舎の四季〉（作詞：堀澤周安，作曲：不詳）の1番は次のような歌詞で、茅葺屋根の農家や長閑な風景が目に浮かぶ。この曲の歌碑が愛媛県大洲市の富士山と十夜ヶ橋に建つ。

へ道をはさんで 畑一面に
麦は穂が出る 菜は花盛り
眠る蝶々 とび立つひばり
吹くや春風 たもとも軽く
あちらこちらに桑つむ少女
日まし日ましに春蚕も太る

イタリアでも養蚕が盛んだった。ロッシーニの歌劇〈絹のはしご〉では人目をはばかる逢引のため主人公が家の裏手から絹のはしごを下ろす。ヴェルディの歌劇〈オテロ〉では夫オテロに妻デスデーモナの貞操を疑わせるため奸臣イヤゴが計をめぐらす道具としてハンカチが重要な役割を果たす。シェイクスピアの原作を読むと「絹のハンカチ」であることがわかる。

夏木マリなどの歌う〈絹の靴下〉（作詞：阿久悠，作曲：川口真）や歌詞の一部に「絹」を含むいくつものJ-POPにも男女の関係を歌った曲は多い。

音楽の世界では「絹」は男女をつなぐ大切な言葉の一つでもあるのだ。